

氏名(本籍)	わた べ あき こ 渡 部 晃 子 (神奈川県)		
学位の種類	博 士 (芸術学)		
学位記番号	博 甲 第 5798 号		
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	米国における美術鑑賞教育の方法論 - 視覚的思考方略 (Visual Thinking Strategies) の理論と実践 -		
主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	齊藤 泰嘉
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	岡崎 昭夫
副査	筑波大学准教授	博士(芸術学)	直江 俊雄
副査	筑波大学准教授	博士(芸術学)	石崎 和宏

論文の内容の要旨

(目的)

本論文は、2000年に米国において出版された幼稚園から小学校までの美術鑑賞教育のカリキュラム『視覚的思考方略』(Visual Thinking Strategies: VTS)の意義や課題を、その歴史的な位置づけ、カリキュラムの分析、実践における課題、日本での受容などの観点から、明らかにすることを目的としている。

(対象と方法)

本論文は、美術鑑賞の研究者ハウゼン (Abigail Housen) とニューヨーク近代美術館 (The Museum of Modern Art, New York: MoMa) の教育部の責任者であったイエナウイン (Philip Yenawine) が共同で開発した『視覚的思考方略』と名付けられたカリキュラム自体を研究の対象としており、これに関する歴史的背景や理論的基盤の検討、カリキュラム内容や構造の分析については文献調査の研究方法を用い、教授学習過程の特徴の解明については映像分析や観察参加の研究方法を用いている。

(結果)

序章では、本研究の背景、目的、対象、方法、内容が提示されている。

第1章「米国における鑑賞教育の展開」では、1960年代から1990年代にかけての芸術批評教育の動向やニューヨーク近代美術館における教育普及活動を跡づけることにより、VTSのカリキュラム開発に至るまでの歴史的背景や理論的基盤を検討した。その結果、米国における美術鑑賞教育への強い関心を背景とし、ニューヨーク近代美術館での美術館教育プログラムやその評価研究が基盤となって、その後にVTSが開発されたことを見出した。

第2章「VTSの教授学習内容に関する考察」では、このカリキュラムの幼稚園から小学校5年生までの学習内容が「芸術への応答」、「芸術との対話」、「イメージの多角化」、「意味生成のプロセス」という4段階に構造化されていることを検討した。その結果、このカリキュラムはハウゼンの提唱した美術鑑賞の美的発達段階(「説明」「構成」「分類」「解釈」「創造的再構成」)に基づいて作成され、学習内容が美術作品に関して連続した思考を促すように体系化されるとともに、美術作品に関する質問事項や生徒の応答へのパラフ

レージング（言い換え）を通して美術鑑賞の授業における教師と生徒との対話を活性化させていることを見出した。

第3章「多角的観点からみた VTS の構造分析」では、個々の学習内容（レッスン）の目標、選定された美術作品、評価の観点から多角的に VTS の学習方法の特徴を検討した。その結果、教育目標に示されているのは個別学習と協同学習の併用による指導方法であり、教師は常にパラフレージングによって授業内容を振り返ることが求められ、選定作品は物語性や多文化性が強く、VTS の評価は指導に還元するために量的評価と質的評価を組み合わせていることを見出した。

第4章「VTS の実践における意義と課題」では、イェナウインが自身の授業実践の様子を記録した DVD 映像を検討した。その結果、VTS の実践では美術作品に関する外的な知識や情報を極力導入せずに対話を展開することにより、生徒の能動的な鑑賞の態度を促し、分析的な発言が増加するという傾向を見出すとともに、VTS は理論的根拠に基づく客観的思考を促進する一方で美術作品を鑑賞した時の主観的な情動をどのように教師が受け止めるかという問題点を見出した。

第5章「非営利組織 UVE の指導者養成」では、ニューヨーク市で 2005 年 5 月に開催された VTS の実践を目指す指導者（教員や美術館関係者）への 4 日間の講習会（主催 Visual Understanding in Education : VUE）に観察参加して得られた記録（音声、映像、メモ）に基づいて講習内容を検討した。その結果、VTS の実践経験が豊富な指導者のパラフレージングには少なくとも「繰り返しと確認」、「修正と補足」、「思考の枠組みの提供」という 3 つの種類があり、これらを通して対話による議論を構造化して作品の解釈に導くような学習の促進を指導者が行っていることを見出した。

第6章「日本における MoMA の鑑賞方法論の受容と展開」では、VTS の基盤となったニューヨーク近代美術館での美術館教育プログラムに関する日本への受容を検討した。日本の関係者への「教育研修」がニューヨーク近代美術館で 1993 年 3 月から 4 月に行われ、これに参加した 20 数名の人々はイェナウインによる美術館教育の講義を受け、アレナス（Amelia Arenas）による対話型のワークショップを体験した。さらに、1995 年 8 月には水戸芸術館において両者が招聘されて美術館教育に関する大規模な特別研修会が開催された。こうした日本での受容の結果、アレナスによる単発的な対話型のみが美術館教育から学校教育の関係者にまで全国的に普及していく現象が確認されるが、そこではイェナウインによる体系的なカリキュラムや学習指導の方略が欠如した状態での受容に止まっていることを見出した。

終章では、以上の各章の内容を要約し、VTS は鑑賞者の美的発達段階を考慮し、美術を通して思考する過程を促進するための有望な可能性を持った方略であり、単に美術作品を介して対話することではなく対話を通じて美術とは何かを考えるための方略を学習者が獲得することに意義があると結論づけ、さらに制作への関連性をどのように確保するかという VTS への課題を指摘している。

（考察）

本論文は、VTS が美術を通して思考する過程を促進するための有用な方略であることを部分的に裏付けたが、未だ十分とは言えず、今後の VTS に関するカリキュラム評価の必要性を示唆している。さらに VTS のカリキュラムに制作面を考慮した内容が加えられるなら、鑑賞が制作に連動することでより強力な美術鑑賞教育のカリキュラム開発が可能になることを本論文で提案している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、カリキュラムの理論と実践の両面から VTS の意義を信頼性のある学術的方法により明らかにするとともに、その課題について独自に検討したものであり、学術的意義を有する研究として高く評価できる。現在日本では、アレナスによる単発的な対話型のみが美術館教育から学校教育の関係者

にまで全国的に普及してきたが、そこでのカリキュラム構造や学習指導の方略の理解の欠如という問題も生じている。この問題解決への1つの対策として本論文の信頼性のある結論により解明されたVTSのカリキュラム構造や学習指導の方略が有効であると認められることから、本論文は美術教育における美術鑑賞のカリキュラム開発の学術的進展に寄与することができる。小学校図画工作科の指導要領においてはその内容が「鑑賞」と「表現」の2つの領域に大別されて以来30年以上も経過するが、それ以前の鑑賞は表現に付随して行うという傾向が未だに強く残存しており、学習者の発達段階に即した美術鑑賞の体系的なカリキュラム開発の事例は数少ない。VTSは我が国における美術鑑賞教育のカリキュラム開発に対する1つのモデルとしての価値を有するものと思われる。さらに、本年4月から小学校に適用される新しい指導要領での全教科における言語活動の育成の充実に対して、図画工作科から1つの方向性をVTSの事例に基づいて提示できるとすれば、本論文には研究の発展性が期待できる。

論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。